

青梅市文化財ニュース

第 8 号

昭和63年 4月25日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 Tel.0428-23-6859)

多摩地区 26 市のうち、青梅市は他市に抜きん出て史跡や文化財があります。その青梅市の中でも塩船観音寺には多くの指定物件が集まっています。背後になだらかな霞丘陵を負い、前に霞川の水田地帯を臨む入り谷の地が長い時間をかけて歴史と文化財を育み、さらにそれを護ってきたのです。

真言宗醍醐 別格本山、塩船観音寺は寺伝によると 7 世紀半ばに八百比丘尼が開創し、奈良時代に行基が再興したといわれ、中世以降は、この地方の豪族である金子氏、三田氏などの保護を受けて隆盛をきわめた、とされています。

寺を訪ねると、まず、その入り口にあるのが仁王門（重文）、三間一戸八脚門、切り妻造りカヤぶきで建築様式から推定して室町時代の造立といわれています。中に威丈高に立つ 2 軀の木造金剛力士像はさらにそれ以前の作とされ都指定文化財です。門を出て進むと阿弥陀堂。やはり室町時代の建造とみられます。さらに参道を行くと石段の左右に夫婦大スギがそびえ、これは都指定の天然記念物。安楽寺のスギとともに全都における、最大級のもので、堂々とした幹と枝ぶりがこの名刹に風格を添えています。昼もなお暗き広場の上の石段を登ったところが観音寺本堂（重文）。間口 12.88m 奥行 11.38m の木造単層の寄せ棟造りのカヤぶきで形式手法などからこれも室町時代の建造と認定されています。まわりの風景とよく調和したこの本堂の前に立つと、その落ち着いた、たたずまいにしげんと手を合わせたくくなります。本堂内陣中央の厨子は一間四方入母造り、妻入、こけらぶきで扉絵は普賢、文殊の着彩板絵で堂宇と同じく重文に指定されています。本尊の木造千手観音立像は像高 1.4m の寄木造り、玉眼入りで着色されていて頭部が大きく、下半身へ行くにしたがい細くなっています。胎内銘に文永元年（1264 年、鎌倉時代）とあります。また、その後背も、ほぼ同期のものとされています。千手観音の左右に居並ぶ 28 部衆の立像は関東ではあまり類を見ない逸品です。昭和 60 年から 3 年がかりで修復が加えられ、往時の姿が復元されたことは喜ばしいことです。次に本堂の東の雨よけ被い堂の中にある板碑は青梅市内で最大のものであり市有形文化財に指定されています。永仁 4 年（1296 年、鎌倉時代）、大勧進僧成円によって一百余人生前の供養として建てられたものです。本堂の裏手の山の斜面には 1 万本といわれるツツジが植栽され、春、5 月には花でおおわれ、多くの花見客で賑わいます。

[お知らせ] 青梅は都下有数の文化財の宝庫として知られています。郷土博物館では今回それらの宝物を一堂に集めた特別展「青梅そのゆかりの文化財」を開催しております。新緑めでるかたがた、皆様御家族づれで是非お出かけ下さい。

期間 10 月 23 日まで（途中展示替えあり）。月曜休館、9 時～5 時開館。

（文責 橋上一彦）